開催日　平成二十七年十一月十四日（土）
会　場　東洋大学　白山第一キャンパス

日本道教学会

第六十六回大会要項

日本道教学会

日本道教学会第六十六回大会案内

拝啓　初秋の候　ますますご清祥のことと拝察申し上げます。

本学会第六十六回大会を来たる十一月十四日（土）に東洋大学白山第一キャンパスにおいて開催いたしますので、ご参加くださいますようご案内申し上げます。

ご参会の方は、同封の郵便振替票をご使用になり、必要事項をご記入の上、十月三十日（金）までに参加費等をお振込ください。また振替受領証は当日ご持参下さい。

敬具

平成二十七年九月三十日

日本道教学会　会　長　大形　徹

第六十六回大会準備委員長　山田　利明

会員各位

○日程表

日	時間	行 事	会 場
13日（金）	16:00～18:00	全国理事会 合同役員会	6号館1階 第3会議室
14日（土）	9:30～	受付	2号館13階 スカイホール
	10:00～10:15	開会式	
	10:15～11:45	研究発表	
	11:45～13:00	昼食	
	13:00～15:00	研究発表	
	15:15～16:15	特別講演	
	16:30～	総会	
	18:15～	懇親会	

○会費

大会参加費　　3,000 円
懇親会費　　6,000 円（学生 4,000 円）

郵便振替口座 00120-4-387381
加入者名　　日本道教学会第 66 回大会準備委員会
※出欠葉書は同封しておりませんので、ご参会の方は事前振込にご協力下さい。

○昼食

昼食は白山キャンパス 6 号館地下 1 階の食堂・周辺の飲食店などをご利用ください。御弁当の注文はお受けいたしませんのでご了承ください。

第六十六回大会日程次第

受付（九時半）
午前の部（十時～十一時四十五分）
開会式

挨拶　大会準備委員長　山田　利明
日本道教学会会長　大形　徹

研究発表（十時十五分～十一時四十五分）
『東医宝鑑』医学体系における養生と修養の思想
東京大学大学院　金　兌垠
司会　立教大学教授　加藤　千恵

博山炉の象徴するもの
大阪府立大学大学院　木﨑　香織
司会　大倉集古館副主任学芸員　田中知佐子

現代葬礼に現れる殯葬改革の影響と伝統葬礼習俗の継承―中国江蘇省における二地域の事例から―
金沢大学大学院　山本　恭子
司会　筑波大学教授　松本　浩一

休憩（十一時四十五分～十三時）
連絡事項・紹介

午後の部
研究発表（十三時～十五時）

『地理新書』にみられる后土神を祭る葬送儀礼　関西大学非常勤講師　宮崎　順子
司会　筑波大学教授　丸山　宏

『太上洞真智慧上品大誡』の「六通智慧」について　大阪市立大学非常勤講師　池平　紀子
司会　真言宗豊山総合研究院上席研究員　田中　文雄

孤陰考　皇學館大学准教授　松下　道信
司会　東京大学教授　横手　裕

邵雍「先天易」の形成―『太玄』との関わりから―　大阪大学専任講師　辛　賢
司会　早稲田大学教授　森　由利亜

特別講演（十五時十五分～十六時十五分）
【東洋大学「エコ・フィロソフィ」学際研究イニシアティブ共催】
洞天思想と自然環境の問題　専修大学教授　土屋　昌明

総　会（十六時半）

懇親会（十八時十五分）

『東医宝鑑』医学体系における養生と修養の思想

東京大学大学院　金　兌垠

『東医宝鑑』は、朝鮮の宣祖が宮中御医である許浚をはじめ、医官たちに医書編纂の勅命を下したことにより誕生した文献である。宣祖が許浚に医書編纂の任務を任せる際に求めた三つの精神は、以下のようである。第一に、修養を先にして薬物治療を次にすること。第二に、中国医薬書が繁雑であるから要点を整理すること。第三に、朝鮮では薬材が多く産出されるが、一般百姓には知られていないので、薬材を種類によって分類し郷薬名を付けることで誰もが分かるようにすること。この三つの精神は、『東医宝鑑』の基本趣旨だといえる。この内容から、朝鮮社会に修養を通じて心身を治める文化がすでに定着していたことが分かる。薬物治療よりも心身修養をより一層重視する養生の思想は、中国古代の『黄帝内経』以来、多くの医家に共有されてきた思想的伝統である。これは、精神の修養を重視するという意味として『淮南子』などの黄老系列文献から「養神」或いは「養性」という用語で論じられている。『東医宝鑑』内景篇は、『黄帝内経』などの中国医書はもちろん様々な道教経典から「形気之始」の宇宙論を始め、天人合一・以道療病・虚心合道・保養精気神・養性禁忌などの道家的治身論をまとめている。一方、宣祖が下した勅命の中で国内産薬材の名称と用法を百姓に知らせて、自ら自分の体を治めるようにするというのは、朝鮮社会において郷薬処方の体系化とともに誰もが自国産薬材を持って養生を実践する医療文化を作る起点であったといえる。また、中国の医薬書を整理するというのは、朝鮮が中国から伝来した医薬知識を独自に再構成しようとした動きを意味する。そこで、『東医宝鑑』が養生の思想に基づくようになった社会的背景、編纂に関わった人物たちの生涯と業績、出典文献とその性格を分析する。また、『東医宝鑑』の編制構成が道教的人体観をどのように表現したのかについて論ずる。

養生と修養は、道教と儒教が志向する理念において両者の共通点及び差異点を意味する言葉である。つまり、道教と儒教は別の思想流派ではなく、窮極的には同じ価値を求めるものといえる。人体と社会が健康になるためには、全体の有機的秩序や調和を追求しなければならないということ、その方案として個人の自己節制と精神的修養を重視するということ、このような考えについて互いに一致している。儒教は道教と比べて心と性情の問題、つまり人間の精神的原理による「修養」に関する論議へと進んでいったといえる。これに対し、道教は気と呼吸、精の保存、神の存思など、宇宙と人体の原理による「治身養生」を主な内容としているので、「養生」という大きなカテゴリーにおいて医学理論により直接的に繋がるのである。宋代以降、儒学の社会的拡張の中で「儒医」の出現のように儒学的知識と医学への探求が共存する現象が現れ、朝鮮においてもこれと同一な様相が見えるようになった。さらに、朝鮮は建国初期から「性理学」を国家理念とし、社会制度から教育と学問の内容まで朱子学中心の時代を展開していったので、多くの儒学者が輩出され、彼らによる医学研究及び執筆が行われるようになった。『東医宝鑑』を著述した許浚は儒医に当たる人物であり、朝鮮の代表的な儒学者李退渓には、明の朱権が道家の養生思想に基づいて著した医学書である『活人心』を筆写した『活人心方』という遺作がある。このような朝鮮儒学者たちの研究内容はもちろん中国の儒医集団である「金元四大家」の医学著述も『東医宝鑑』の出典として引用され、当時盛行した儒学的要素が『東医宝鑑』の医学体系に修養論として適用された。そこで、『東医宝鑑』の内容やその出典文献を通じて、中国の道教及び儒教が「養生」という思想のもとで朝鮮の医書にどのように受容されたのかを考察する。

博山炉の象徴するもの

大阪府立大学大学院　木﨑　香織

西域では香を儀式において使用した。エジプトの「口開けの儀式」では、香を焚く手順があり、ファラオの復活のための儀式である。「古代エジプトの人々は神や彫像に命を吹き込もうとする時、彫像の口を開くことによって霊魂が入ると信じていた」。また、旧約聖書『出エジプト記』三十章には、香壇の作り方や香油の調合方法について記され、この香りは祈りとして神のもとまで立ち上る。このように、西域では復活再生の儀式や神へ祈る時に、香りを使用する習慣があったのである。

西域には博山炉に類似する香炉が既に存在していた。アケメネス朝ペルシアの女性像付き香炉〔図一〕は博山炉との関連が指摘されており、クセルクセス一世謁見図（アケメネス朝ペルシア、前五世紀前半）にも、謁見の儀式に香が使用され、博山炉とよく似た香炉が使われている。中国の香炉は西域香炉の影響を受けた可能性が高い。

湖南省長沙馬王堆一号漢墓出土の彩絵陶熏爐（前漢初期）〔図二〕は同墓出土の薫爐罩〔図三〕・中草薬と合わせて使用したと考えられる。内部に「高良薑と辛夷等」が発見され、衣類などの薫蒸が目的であった可能性が高い。この形態的特徴は博山炉に近く、上に鳥が載る銅博山爐（漢、青銅、高二六・八センチ）と似ている。彩絵陶熏爐は博山炉の前駆形体であると言える。戦国末には既に薫炉が存在し、前漢早期になると彩絵陶熏爐のような薫炉が生まれ、前漢中期には博山炉が完成したと考えられている。博山炉とは「海中の仙山を象った薫炉」とされる。「六朝以降に初めて博山香炉と呼ばれるようになったもので、それ以前は主に銅薫炉などと呼ばれていた」。晋『東宮故事』、宋・高承『事物紀原』から、漢代に盛んに用いられたことが分かる。薫炉とは衣類などを薫蒸するための道具で、香草類や西域由来の樹脂系香料が使用されたのであろう。

道教三尊像（北魏、延昌四年、五一五）〔図四〕、道教四面像（北魏、甲戌銘、五五四）（いずれも、大阪市立美術館所蔵）は仏教の影響が強く、そこに描かれていた博山炉によく似た香炉がみられる。道教でも香が使われたのであろう。

中国の雲気文は、エジプトのパルメット文様やペルシア系連珠文に由来するとされ、霊芝も同様、エジプトの蓮の文様を起源とする。そこで、博山炉はもともと仙山を象った山の形ではなく、睡蓮や蓮の蕾の形であり、蓮のもつ復活再生のイメージと重ね合わせる考え方がある。米脂墓門左立柱画

像〔図五〕などの画像石では、蓮のシルエットそのものであるが、この形が西域由来のものであれば、香りが復活再生と祈りに関係するという思想も一緒に流入した可能性がある。満城一号漢墓出土の銅錯金博山炉や二号漢墓出土の博山炉は、明記として墓主と共に埋葬されたものである。墓主の異世界、または来世での復活再生の祈りが込められていると考えることもできる。

晋・葛洪『西京雑記』巻一には、「九層博山香鑪」の装飾について、「鏤みて斉禽、怪獣を為し、諸靈異を窮め、皆な自然運動す」と別世界を表現している。この博山炉の装飾は山岳信仰と神仙思想の影響を受けたものと考えられ、山岳文様を代表として羽人や神獣と思われる装飾などがある。博山の名は蓬莱山と関係するという説もあり、博山炉自体が蓬莱山を象ったもので、博山炉の中に異世界が広がっているという発想に繋がる。博山炉の内部は香を焚くために空洞状になっており、瓢箪にも似ている。壺中天や洞窟を通過する桃源郷の話にある様に、博山炉の中が異世界へと通じているとする考え方がある。また、博山炉と同じ様な蓋を持つ酒樽や鼎・壺などの器類も存在するが、こちらも中は空洞で、博山炉と同様に解釈することができる。須弥山の形とも似ている。飛鳥時代の須弥山像（東京国立博物館）には、博山炉のような山岳文様と見られる文様がある。

道教は仏教の影響を大きく受けた。香を焚くのも、仏教の影響による博山炉の装飾は本来、必ずしも仏教や道教と関連しない。羽仙博山炉〔図六〕、騎獣人物博山炉〔図七〕には鎖の付いたものがあるが、鎖の付いた香炉はアッシリアの壁画で見られ、人が炉身を支えている香炉は、アケメネス朝ペルシアの香炉と類似し、その顔は西域の人物である。博山炉には西域の文化が反映されていると共に、漢代の山岳思想と神仙思想をも含み、仏教伝来以降は道教儀式の中にも取り入れられ、さまざまな思想が入り混じっている。しかし、そのベースには宗教があるのだろう。人の祈りや死者の魂を天界や異世界に送り、あるいは死者が来世で復活再生できるようにとの願いが込められたものであったのかもしれない。

図一

図二

図三

図四

図五

図六

図七

現代葬礼に現れる殯葬改革の影響と伝統葬礼習俗の継承
——中国江蘇省における二地域の事例から——

金沢大学大学院　山本　恭子

中国における葬礼の儀礼習俗は、一般に「地域により異なる」とされている。清末、民国期の伝統的な葬礼に関する当代地方志の記述によれば、「壽衣」と呼ばれる死装束を着せる時期(死亡前或いは死亡後)、遺体を清める水を川や井戸の神から買う「買水」習俗の有無等、地域差がみられる儀礼習俗が認められる。そのような伝統的な葬礼習俗は、中華人民共和国成立以後、政府が「殯葬改革」を進めたことにより衰退したとされる。しかし、その変化の実態は明らかではない。本発表は現代中国における葬礼の事例研究として、江蘇省徐州地域(徐州市及び周辺農村地域、宿遷市沭陽県と連雲港市東海県)、及び蘇州地域(蘇州市と周辺農村地域)における聞き取り調査の結果により報告する。

現在、調査地域では土葬は禁止されている。火葬を行うことは法的に義務付けられており、葬礼には火葬が組み込まれている。公には迷信的な儀礼は排除され、火葬場が併設された葬儀施設である殯儀館での「遺体告別式」が葬儀であり、火葬後の骨灰は公墓に埋葬するとされる。公墓に埋葬する場合、棺を用いることはできない。しかし、現地での聞き取り調査によれば、市区での葬礼には変化が窺えるが、農村地域では現在も基本的に伝統的な葬礼が継承されている。

それぞれの地域に現れる葬礼習俗には異なりがみられる。徐州地域では、死亡前に壽衣への更衣を行う。「報廟」は、近世以後、華北を中心に広がった習俗であるが、現在もなお重要な儀式として行われている。この習俗は、死者の魂が一定期間、廟に留め置かれるという民間信仰に基づいている。親族は一日に三度、行列を作って土地廟へ行き、湯や重湯を撒いたり、香を焚いたり、紙銭を燃やす。現在、調査地域では土地廟は既に消失しているところが多いが、路傍に椅子や莫蓙、ダンボール等を用いて臨時の土地廟を作って行われる。この地域の葬礼は僧や道士によって進行されるのではなく、喪家から依頼された「大老執」、「大総」等と呼ばれる一般の男性によって取り仕切られるという特徴を持つ。彼らは儀礼の専門家ではないが、伝統的な葬礼を継承する役割を果たしてきたと考えられる。

蘇州地域では、死亡後、遺体に壽衣を着せて「孝堂」に安置する。そこでは「念佛老太」と呼ばれる一般の女性たちが八時間から十時間、経をあげる「念佛」が行われる。「報廟」は死亡後、一度だけ親族が土地廟へ行き、廟神に死の報告をするという形態で行われる。「念佛」の後、喪家に招かれた七人の道士が十時間以上かけて「道場」を執り行う。また、死亡日から三十五日目に行われる「五七」と呼ばれる儀式の際にも道士が招かれる。

調査地域における葬礼は火葬が組み込まれる等、「殯葬改革」による変化が生じている。しかし、変化を受容しながらも伝統的な葬礼習俗は継承されており、地域的特徴が保存されている。

『地理新書』にみられる后土神を祭る葬送儀礼

関西大学非常勤講師　宮崎　順子

北宋の風水地理書『地理新書』には葬送儀礼について述べた部分があり、そこに后土神を祭る儀式についての記述が見られる。該書における后土の祭りは、三種類の儀式に分類できる。「斬草」、「明堂」、「謝土」である。すべて土地使用の許可を土地神に対して乞う儀式であり、「斬草」「明堂」は墓地を新たに啓く時に行い、「謝土」は埋葬後に行う。ここでいう「明堂」とは皇帝が政治を行ったり祖先祭祀を主宰したりする建物を指すのではなく、墓地を四十九分割した中心部分を指して明堂と呼んでおり、そこに設置した壇上で土地神の祭事を行うのである。

「斬草」には「鉄を用いて地券文を作成し地心に埋める」という記述があり、買地券を埋める儀式でもあった。祝文中の土地神の名称の多くは、漢代の買地券に記されている神々と一致する。また方形の壇を製作し（付図によると三層の壇）、その上に東西南北の門と天門・地戸・人門・鬼門の八門を開くことや、神位を設けることなどが記されており、『無上秘要』黄籙斎品記載の道壇と類似が見られる。

「明堂」と「斬草」の関係については記述に混乱があり、明確には記されていないが、「明堂」とは「斬草」儀式

のバリエーションの一つと考えられる。

これら葬送儀礼は、先行する様々な儀礼の影響下に成立したものであろう。『赤松子章曆』（「謝土」章等）には『地理新書』の記述と重なる点が見られるし、「斬草」という用語は敦煌文書スタイン二二六三に記されている。

また『大唐開元礼』『司馬氏書儀』『朱子家礼』『政和五礼新儀』中に記されている一連の儒教系統の埋葬儀礼とも共通する部分がある。これらの文献は儒教の礼制に則りながら、民間に行われていた儀式を一部取り入れたところもあるといわれるが、ここにも死者の埋葬前後に后土を祭ることが記され、墓を占って墓地を決定する「卜宅兆」を行うに際して后土を祭り、埋葬の後に再度「祭后土」を行うという手順が定められている。

拙論「風水地理書『地理新書』と『塋原総録』にみられる葬送儀礼について―后土信仰を中心に」（『関西大学中国文学会紀要』第三六号二〇一五年三月）において、「明堂」と「斬草」について式次第を紹介したが、他文献との比較までには至らなかった。本発表ではさらに「謝土」の儀式も含め、様々な影響関係を検討してみたい。

『地理新書』の葬送儀礼を検討することを通して、道教、儒教と民間信仰が重なり合う場において、当時の人々が土地神、ひいては土地そのものを如何に考えていたのかが明らかにできればと思う。

数年前、山西省の金代の墓中から、四十九分割された土地区画を記した方形の石と墓券文が重ねて置かれているのが発見された。金では『地理新書』の葬送儀式が実際に行われていた事が推測されるのである。

『太上洞真智慧上品大誡』の「六通智慧」について

大阪市立大学非常勤講師　池平　紀子

『太上洞真智慧上品大誡』（『正統道蔵』洞真部戒律類、上海涵芬楼本第七七冊、CT177）は、元始天尊が太上道君に授けたとされる以下のような六種の戒について説いたものである。

①十誡…十条
②十二可従…十二条
③智慧閉塞六情上品誡…六条
④智慧度生上品大誡…六条
⑤智慧十善勧助上品大誡…十条
⑥智慧功徳報応上品誡…七条（敦煌本は八条）

テキストの由来は、陸修静撰『霊宝経目』の元始旧経の第十三項目に挙げられる『太上洞玄霊宝智慧上品大戒威儀』（『霊宝中盟経目』と『斎壇安鎮経目』では経名を『智恵上品大誡経』と記す）に相当する経典である。『無上秘要』巻四六は本経の①から⑤までの五種を「右、洞玄智慧上品経に出ず」として抄録するが、⑥の「智慧功徳報応上品誡」については収録していない。これは『無上秘要』成立時、本経に第六の戒が存在しなかったことを必ずしも

意味しないが、その存在が確認できる資料は敦煌写本P2461と唐・朱法滿『要修科儀戒律鈔』の引用であり、しかもP2461は概ね道蔵本と同構成・同文であることから、現道蔵本の内容を持つテキストの完成は唐代以前と考えられる。

受戒の対象者について、本経は「（①十戒と②十二可従の）両戒を受けた者は大道清信弟子となり、更に精進すれば大道十転弟子（飛天）と称する」としている。楠山春樹氏はこの両戒の内容が在俗戒としての性格を強く持つと同時に、初歩的出家者が守るべき戒も含まれるとして、本経における清信弟子を「在家を含む初信道士の称号」と定義づけている。また、第三の智慧閉塞六情上品誡以降の諸戒についても、その内容から対象は在俗の信者もしくは初信道士と考えられる。

本発表では特に③と⑤の戒について取り上げたい。③「智慧閉塞六情上品誡」は六種の身体器官（目・耳・鼻・口・手・心）の作用よりする貪欲（六情）を戒めるもので、この六情は仏教の六識（目識・耳識・鼻識・舌識・身識・意識）に相当するものと考えられる。戒目の後には、天尊の説教として、この六種は身の大患であり、この戒を守れば「洞視（目）」「洞聴（耳）」「洞空（鼻）」「洞虚（口）」「洞清（心）」「洞微（手）」という「六通智慧」が得られると説かれる。一方、⑤「智慧十善勧助上品大誡」では、この十善戒を修めた「大道十転弟子」は「六通智慧」を得られるとされ、さらに体内神とも関連づけて詳述される。

両戒に共通する「六通智慧」について検討し、さらに道教における戒と身体と神の関係について考察したい。

孤陰考

皇學館大学准教授　松下　道信

宋代から金・元にかけて内丹道は隆盛を極め、さまざまな流派が登場した。代表的なものとしては、王重陽から始まる全真教や、それに先行してやはり頓悟を重視した張伯端以下の内丹道などが挙げられる。

こうした流派は清静派や陰陽派（もしくは双修派）という名称でしばしば分類されてきた。清静派とは修行者一人で修行を行うものを指し、陰陽派とは修行するにあたり男女が性行為にも似た行為により修行するとされるものである。たとえば張伯端以下の内丹道では、張伯端に続き、石泰――薛道光――陳楠――白玉蟾といった系譜や、劉永年――翁葆光――若一子――龍眉子といったいくつかの系譜が説かれるようになるが、その内、石泰以下の系譜は清静派、劉永年以下は双修派とされる。その他、全真教を清静派、また陳致虛などを陰陽派とすることもある。

翁葆光や陳致虛らを陰陽派と分類する根拠の一つが「孤陰寡陽」や「独修一物」といった用語である。これらは、陰陽のうちの一方にのみ従って修養することを指すとされ、陰陽すなわち男女の双修をしない修行者への批判とされる。

しかし、「孤陰寡陽」や「独修一物」の用例を丹念に調べてみると、こうした解釈には従いがたい。例えば翁葆光

は『悟真篇』の註釈の中で、孤陰に関連する箇所を解釈するにあたり、房中術的な解釈に引きつけることを戒めている。また彼らの文中には房中術を意味する「三峰採戦」に対する批判が随処に見受けられる。すなわち陰陽派の存在を仮定するならば、彼らは一方で房中術を否定しつつ、同時にそれと近い行法を行っていたこととなり、苦しい解釈を迫られることになる。その他、上記の陰陽派とされる人々以外の文献にも「孤陰」の用例が見られる。例えば五代の陳摶「観空篇」では孤陰を守る者が性空を得るとされており、ここには禅宗への批判が込められているようである。

管見の及ぶ限り、宋代から元にかけて、全真教や張伯端以下の内丹道の文献には清修派や陰陽派といった呼称を用いた文章は存在しない。このように考えてくると、「孤陰」や「独修一物」という用語は当時の張伯端以下の内丹道で意識されていた、仏教をはじめとする別の流派や立場の人々を批判しているに過ぎないのであり、清修派への批判や陰陽派の存在を即座に意味しないのではないか。

なお後世、明の陸西星以降になると、「隔体神交」という考え方が見られる。これは男女がともに修行するものの、衣服をつけたまま神（意識）のみの交合を行うとされるものである。つまりこれは三峰採戦の否定と陰陽双修の実践の双方を両立させることとなり、上の矛盾を解消するものであるといえるかもしれない。清静派・陰陽派といった分類は、こうした考え方の登場と関連しているのではないか。

以上、本発表では孤陰という用語をめぐり、陰陽派の存在について論じてみたい。

邵雍「先天易」の形成 ――『太玄』との関わりから――

大阪大学専任講師　辛　賢

南宋初の朱震が著した『漢上易伝』「進周易表」には、先天易がどのように継承されていたのかが記されている。それは、先天図を道士陳摶の創案とするものとして（「陳摶―种放―穆脩―李之才―邵雍」）、道教を源流に先天易が始まっていたことを窺わせるものであった。これに対して朱熹は、先天図（伏羲八卦方位図）と『周易参同契』に見える納甲図とが類似していることに注目し、先天易は陳摶以前から存在し、孔子にまで遡ると主張した。一方、明の帰有光は、先天易の根底を支える暦法が邵雍の手に成ったとして、先天易は邵雍の独創によるものであると主張した。さらに清の胡渭や黄宗羲は、先天図と説卦伝の「天地定位」章とは全く無関係であると否定し、先天易は『周易参同契』に由来するものであると主張するなど、先天易の成立をめぐる議論は錯綜を繰り返したのである。

ところが、清の劉斯組は著述『太玄別訓』「序」において全く新しい見解を述べている。

すなわち、「邵子の皇極、深く太玄の精奥に契う。……悉く玄に準う」と述べ、邵雍の先天易は前漢の揚雄の『太玄』をなぞらえて作られたものであるとしているのである。かつて朱熹は、『太玄』は「半端で取るに足りない」と

酷評したものの、『太玄』と邵雍の先天易とが数理的に似ていると触れていた（『朱子語類』巻第一百「邵子之書」）。

本発表では、邵雍の先天易と揚雄の『太玄』との関係、とりわけ数理的仕組みに注目し、先天易の形成における『太玄』の位置について考えてみたい。

特別講演（東洋大学「エコ・フィロフィ」学際研究イニシアティブ共催）

洞天思想と自然環境の問題

専修大学教授　土屋　昌明

洞天とは、山中の洞窟内にある神仙世界であり、通路によって、別の洞天と地下で結びついている。そこは、地上の人間世界に近いが、天上の神々の世界にも通じている世界だとされていた。このような考え方を「洞天思想」という。

洞天の問題については、三浦國雄氏の「洞天福地小論」（『東方宗教』第六一輯、一九八三年）によって詳細に論じられた。洞天思想の起源は、カルスト地形の洞窟の神秘に対する畏怖に由来する。五世紀半ばの茅山では、洞天思想はすでに中核的地位にあった。陶弘景『真誥』「稽神枢篇」には、句曲山にある金壇華陽洞天のことが詳しく記述されており、「三十六洞天」にも言及されている。その後、唐代に司馬承禎（六四七～七三五）が『天地宮府図』（『雲笈七籤』巻二七）で、十大洞天・三十六小洞天・七十二福地の体系を確立させ、玄宗皇帝はこれを信仰して祭祀をおこなった。洞天思想は、変容しながらも現代にまで至っている。

本発表では、唐代の洞天思想を軸にして、洞天とされる場所がなぜ重視されたのかを、自然環境との関わりを視野に入れて考察してみたい。そのような考察は、道教とエコロジーの問題の一部を成すであろう。

そのためにはまず、現地の状況を認識しなければならない。その上で、ある山が洞天として重視された歴史的要因を考えることになる。その際、次の点も考慮されるべきである。すなわち、洞天の多くは、単に洞窟があるから洞天とされたのではなく、洞天思想が成立する以前から、特色ある場所とみなされた要素があった可能性がある。その要素は、山中における修道で必要な珍奇な薬草や薬石を生ずる自然環境にあったと思われることである。

現地の状況を認識する上で、私どもは、平成二一～二三年度科学研究費補助金基盤研究（B）「中国道教における山岳信仰と宗教施設のネットワークに関する総合的調査と研究」と平成二四～二六年度科学研究費補助金基盤研究（B）「中国道教の地理的イメージと宗教的ネットワークに関する総合的調査と研究」において、十大洞天のうち八カ所を実地調査し、その洞窟と自然環境について認識を新たにした。本発表では、この実地調査による現地の状況を紹介しながら、如上の問題を考察したい。考察に当たっては、考察対象が多岐に及ぶため、特に十大洞天の第一大洞天とされる王屋山と、それに関わって洞天思想において重要な人物である魏華存を中心にしたいと思う。

【東洋大学「エコ・フィロソフィ」学際研究イニシアティブ】二〇〇五年設立。東京大学が二〇〇五年に設立したサステイナブル・サイエンス確立のための研究機関IR3Sに参画し、主に「持続的発展」の思想的基盤を提示することを目的とした研究機関。現在は、東京大学・国連大学・大阪大学等とともに、一般社団法人サステイナブル・サイエンス・コンソーシアム（SSC）の機関理事を務めるなど、「持続可能な発展」のための研究とその成果等の発表を行っている。

切り取ってご利用下さい

出張依頼状

日本道教学会第六十六回大会を、来る十一月十四日（土）に東洋大学白山キャンパスにおいて開催いたしますので、貴学　　氏をご派遣いただきたく、依頼申し上げます。

平成二十七年九月三〇日

様

日本道教学会　会　長　大形　徹
第六十六回大会準備委員長　山田　利明

都営地下鉄三田線「白山」駅
　A3 出口から「正門・南門」徒歩 5 分
　A1 出口から「西門」徒歩 5 分

東京メトロ南北線「本駒込」駅
　1 番出口から「正門・南門」徒歩 5 分

日本道教学会第六十回大会要項

発行日　平成二七年九月三〇日
発行者　日本道教学会第六十六回大会準備委員会
委員長　山田　利明
〒一一二―八六〇六　東京都文京区白山五―二八―二〇
東洋大学文学部　東洋思想文化学科　山田利明研究室内
電話／ＦＡＸ〇三―三九四五―七三六三